

日曜聖書講筈（婦選会館 公開集会）

十字架の七言

——マルコ伝第15章20～39節——

1965年4月11日

小池辰雄

異端の首 自己義認が罪 霊的な罪 「彼らを赦し給え」(第一言) 「今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし」(第三言) 絶対無条件の救済 「なんじの子なり。なんじの母なり」(第三言) 「なんぞ我を棄て給いし」(第四言) 絶対矛盾の叫び 絶対無条件降伏 「われ渇く」(第五言) 「わがこと終りぬ」(第六言) 「わが霊を御手にゆだね」(第七言)

【マルコ15・20～39】

20 かく嘲弄してのち、紫色の衣を剥ぎ、故の衣を著せ十字架につけんとて曳き出せり。21 時にアレキサンデルとルポスとの父シモンというクレネ人、田舎より来りて通りかかりしに、強いてイエスの十字架を負わせ、22 イエスをゴルゴタ、釈けば髑髏という処に連れ往けり。23 斯て没薬を混ぜたる葡萄酒を与えたれど、受け給わず。24 彼らイエスを十字架につけ、而して誰が何を取るべきと、鬨を引きて其の衣を分かつ、25 イエスを十字架につけしは、朝の九時頃なりき。26 その罪標には『ユダヤ人の王』と記せり。27 イエスと共に、二人の強盗を十字架につけ、一人をその右に、一人をその左に置く。28 「なし」29 往来の者どもイエスを譏り、首を振りて言う『ああ宮を毀ちて三日のうちに建つる者よ、30 十字架より下りて己を救え』31 祭司長らも亦同じく学者らと共に嘲弄して互いに言う『人を救いて、己を救うこと能わず、32 イスラエルの王キリスト、いま十字架より下りよかし、然らば我ら見て信ぜん』共に十字架につけられたる者どもも、イエスを罵りたり。

33 昼の十二時に、地のうえあまねく暗くなりて、三時に及ぶ。34 三時にイエス大声に『エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ』と呼り給う。之を釈けば、わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし、との意なり。35 傍らに立つ者のうち或る人々、これを聞きて言う『視よ、エリヤを呼ぶなり』36 一人はしり往きて、海綿に酸き葡萄酒を含ませて韋につけ、イエスに飲ましめて言う『待て、エリヤ来りて、彼を下ろすや否や、我ら之を見ん』37 イエス大声を出して息絶え給う。38 聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなりたり。39 イエスに向かい立てる百卒長、かかる様にて息絶え給いしを見て言う『実にこの人



は神の子なりき』

●異端の首

十字架につく前の、いろいろないきさつのことは省きまして、もっぱら十字架に焦点を結んで、マルコ伝15章20節から読みます。

これがマルコ伝の十字架の一番焦点の記事です。ナザレのイエス、人を愛し、またすべて悩める者、泣く者、苦しめる者、病める者を慰め、これを癒し助けた。こういう人が、なぜ十字架に架けられたのだろうか。全くこれは言語道断なことです。その一番の張本人たちは実は宗教家たちであつた。また、学者もやはり——学者と言っても、モーセの律法に詳しい学者で、結局、宗教的な部類の人たちです——宗教人がイエスを迫害した。いわば宗派争いのごときもの。

宗教の世界で一番醜いものは、この宗派争いです。これは東西いたるところにあつて、日本の仏教においてもあつたし、キリスト教においてもそのために血を流した歴史がある。30年戦争なんでも起こつた。カトリックとプロテスタントの争いでもあつた。そういうことを考えると、一体、宗教なんてのは実にいやらしいと、一般の人がそれで敬遠してまうという、原因の一つでもあるかと思ひます。しかも、

「自分たちは正統派、オーソドックスである」

と言うご連中が、何か創造的な本当の深い真理に立つ人たちをみな異端視して迫害してきたということが、宗教史において、キリスト教においても仏教においても、歴史を見るとよく見られるところです。

その最たるものがこのイエス・キリストであつた。

「異端の首」^{かしら}

といえ、イエス・キリストは実にユダヤ教に対するところの異端の首であつた。ところが実は、このユダヤ教および預言者の宗教、預言者および祭司の宗教の一番の深い根本的な行じ者^{しや}である。本当の改革者であり、また本当の行じ者である。

これが読めないわけですね。それは結局、その宗派の正統と自ら任ずる者たちが、己を義としているわけです。要するに、宗教的な争いというものはみな、自己義認で他を排斥している。パリサイ根性^いというものが大かれ少なかれ働いて、そういうことになる。パリサイ的ないわゆる自分の熱心、自分の確信、そういうことが宗教の世界では一番ありがちなんです。信仰が強くなればなるほど、その危険性はまた非常に強い。

ところが、イエスという方は、これ以上の信仰者はないわけです。非常に強い信仰をもつておられる。けれども、彼はおよそそういうパリサイ根性とは正反対である。信仰というものの対して一般のクリスチャンは、

「キリスト、キリスト」



と言うけれども、そこを本当に見なかったらば、いくら聖書の研究をしても、いくら教会通いをして、これは本筋には行けないというわけです。

●自己義認が罪

人間の「罪」と言いますが、ただ観念的に罪というようなことではなくて、具体的に、彼らの罪の一番最たるものは、この自己義認が罪である。一応立派なんですよ、自己義認者は。

「律法の義につきては責むべきところなし」

と、サウロ（パウロの前身）は立派であった。ユダヤ教に対して非常に忠実であって立派であった。何か非常にけしからんことをいろいろ、いわゆる罪というようなことを彼はしたわけではない。非常に立派で自己が義しいと思っているから、とうとう最後には、ステパノを殺すようなことまで、やはり、宗教的な迫害をやった。老若男女を捕まえては、牢屋に引張っていくような役割までやっている。これは熱心、神に対するわが熱心、というやつです。

キリストを十字架につけたことの、人間の罪の一番恐ろしいものは、そういった道徳的宗教的な、意志的な、むしろ霊的な罪である。それが人もあろうに、最大の弟子パウロがそうであった。これはなんと不思議なことであるか。彼自身が、

「我は罪びとの首である」 かしら

と告白し、自分の義を

「塵芥」 ちりあくた

と自ら言った。キリストを得たことのゆえに、これを塵芥とみなした。それだけに、これほどはつきりした黒と白との、光と闇との転換をした人がない。パウロがなるほどキリストの十字架を一番深くつかまえたということは、彼がそのような意味において、最大の罪を犯したということであって、パウロは絶対無条件にキリストの前に降参した。

私は今度、京都で5月の終りに（1965年5月29～30日）、

「無条件降伏」「中央突破」「決定的勝利」

という三つの題目を掲げて、3回にわたって講演をいたします。まるで、戦争の題目みたいな、無条件降伏の、中央突破の、決定的勝利のという。

そういう無条件降伏をパウロは十字架の前に――いや実に彼は告白だけではない。告白どころではない――彼は本当に無条件降伏を事実、ダマスコ途上でさせられてしまった。どうにもならんですよね、ぶつ倒されてしまって。もう目が見えず、耳が聞こえず、口がきけずと、こういう始末ですから。

「お前はとんでもない間違いだ。私の十字架に対しての逆らいである！」

と。とうとうキリストは、もう原子力どころではない、霊力爆弾をパウロにくらわしてしまふ。



キリストの十字架は深い一つの、意味ではなくて事実なんです。よく、「聖書解釈学」なんて、一生懸命で釈義を問題にしている。釈義をどうのこうのということではない。事実なんです。事実をもってキリストは、文句なしの世界に入れたわけです。このことはなにもパウロに限らない。実に、パウロの告白は直ちに私たち自身の告白です。キリストの前に、

「汝の目の中の梁木を取り除け」
うつばり

ということ。私は性格的にいえば、パウロとはだいぶ違う人間だけれども、もちろん小さな人物ですけども、パウロのその告白はよくわかるわけです。

●「彼らを赦し給え」(第二言)

「十字架上の七言」と、いつかもこんな題でお話したかと思いますが、まず第一に発せられた言葉としては、ルカ伝23章33節あたりから読みますと、

「³³ 髑髏^{されこうべ}という処に到りて、イエスを十字架につけ、また悪人の一人をその右、

一人をその左に十字架につく。³⁴ 斯くてイエス言い給う『父よ、彼らを赦し

給え。その為す所を知らざればなり』(ルカ23・33～34)

さきほど、司会者が神さまとの会話のお話をされました。そのお話はまことに然りアメンです。しかも、私はどうも皆さんとの会話が少ないらしいので、まことに耳が痛い面がある。私は、しかし、会話は皆さんといくらでもしたいんですよ。どうか、いつでもつかまえてお話ししてください。いつ来てもいいですよ。

「先生は忙しいから遠慮しよう」

なんて、そんな遠慮はいらん。来れば、30分や1時間くらいのうちなら、いつでもお相手します。それから1時間延長して、自分の仕事をすることは何でもないですから。一昨日はほとんど3時間くらいしか寝てない。

「父よ、彼らを赦し給え。その為す所を知らざればなり」

と。お父さんに向かって、「父よ」と呼んだ。これは、今の自然科学の世界で育っている方々にはむずかしいですよ、ね、「父よ」というようなことを呼ぶのが。

「神さまを『父よ』なんて言ったって、どういうことか」

と。認識的に考えたら、それはわからんですよ、「父よ」なんて。それは認識の世界ではないんだから。

「それでは、仏教に仏さんの像があるが、キリスト教も、『父よ』というなら何かお父さんみたいな像を造ったらよからう」

なんて。ところが、そんなものは一つもない。偶像を造ってはいかんとある。全く霊であり、しかもそれを「父」と呼ぶ。これはもう絶対に説明のつかないことです。「父」という言葉で信頼し呼びかけるほか、キリストは仕方がなかった。人間は肉の身をもっているね。こういう親子の関係が一番深い。一番地上で深い関係は親子の関係です。この頃はだいぶ薄



いような面もあるけれども、実は本当は薄くはない。また、聖書では、神さまとイスラエルの関係を夫妻、夫婦の関係として、ホセヤなんていうのはそれを示されたわけです。とにかく、非常に深い人格的な関係です。

そこで、キリストは「父よ」と一言呼ぶときに、もう一切であるわけです。

「父よ、彼らを赦してやってください」

と。「自分が彼らを赦す」とはキリストは言われない。

「父よ、彼らを赦し給え。その為すところを知らないのであるから。私に對してとんでもない間違つたことをしているが、どうか、赦してやってください」

と。神の子としての深い自覚であり、また、父に

「赦してやってください」

と執成しておられる。これは、その言葉自身がもう大祭司の言葉です。キリストを

「大祭司」

と言うのはそういうことです。

祭司は人を執成して、神との平和の交わりの世界に、喜びの世界に入れる。元来、祭司宗教というものは非常に大事なものをもっているんですが、それがいわゆる坊さん宗教に、いわゆる戒律宗教になつてしまつたものだから、「祭司」という言葉が非常にいわゆる坊主臭いようなことですけれども。本当の祭司は——預言者は実に自由に神さまから選ばれているのだが——祭司というものの本質はそういった職業的なものではない。エレミヤという預言者は祭司の子です。けれども、彼の中には深い意味における祭司的な面と預言者的な面と両方あります。非常に愛の人ですから。

先ず第一に、罪の赦しをキリストはここで神に乞われる。自分の十字架というものをもつて人間を贖罪する。

「赦してやってください」

というのは、傍観して言っているのではない。単なる同情で言っているのではない。事実、自分が身代わりになつて人間の罪を引き受けているから、

「彼らを赦してやってください」

というこの願いが、この祈りが本当の願いであり、本当の祈りである。実力のある祈りです。自分がそこに身を置いていいるから。

私たちの祈りはすべてそういった提身的な、そこに身を置いていいる、その場においての祈りでなければ、その祈りは力とならない。本当に達せられない。自分をそこに挺している祈りは必ずきかれるわけです。傍観的な体裁のいい、いわゆる同情といったような、そういうことではない。その身を棄てての祈りです。

「4まことに彼はわれらの病患を^{やまい}おい、我等の^なかなしみを担えり。然るにわれら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。」



このイザヤ書53章はまるでキリストの十字架を見てものを言っているような、驚くべき預言者の書です。

5 彼はわれらの愆^{とが}のために傷けられ、われらの不義のために砕かれ、みずから懲罰^{こらしめ}をうけてわれらに平安^{やすき}をあたう。そのうたれし瘡^{きず}によりてわれらは癒されたり。」（イザヤ53・4～5）

私が「砕けの神学」なんて言ったのは、この砕けに始まっている。

「われらの不義のために砕かれ、みずから懲罰^{こらしめ}をうけ」

という。自ら砕かれつつ、十字架で裂かれつつ、血を流しつつ、生命を屠りつつ、献げつつ、
「父よ、彼らを赦してやってください」と。

「これは贖罪の死ですから」

なんて、そんな説明は彼はなさらない。事実が語っている。

「十字架の言」

というのは、十字架という事実が語っている言葉以上の言葉がそれです。

皆さんは、私たちは、語りつつまた聞きつつ、その現実に入っていないかなくては。私はこれを語りつつ、途中でもう語るのがおそらくかなわない気持ちになりそうです。壇上でなんかで語られる事柄ではないんだから。私たちはただこの十字架のところに来たら、平伏して読まなくてははいられない。呑気な安閑としたような気持ちでこのところが読めたら、それは冒瀆です。

「彼らイエスの衣を分かちてくじ取りにせり」（ルカ23・34）

「衣を分かち云々」というのは詩篇22篇にそんなことが書いてあるものだから、その通りにやっているわけです。詩篇22篇というのは、ひとつの十字架の言葉がそこに出ている。

「わが神わが神なんぞ我をすてたもうや。何^{いか}なれば遠くはなれて我をすくわず、わが歎^{なげ}きのこえをきき給わざるか。……

という言葉に始まって、18節にくじを引くことが書いてあるでしょ。

18 かれらがいにわが衣をわかち我がしたぎを鬨^{くじ}にす。19 エホバよ遠くはなれ居たもうなかれ。わが力よねがわくは速^{とく}きたりてわれを援^{たす}けたまえ。」（詩篇22・1：19）

と。おそらく、イエスは期せずして、22篇のこの最初の言葉およびその内容がサッと来ておられたと思います。

その前に、ちよつと引用するのを忘れましたが、

26 その罪標^{すてふだ}には『ユダヤ人の王』と記^{しる}せり。

とある。これは

「INRY」



という罪標の文字です。「I」ではなく、これは「J」ですけれども。

「イエス・ナタレーヌス・レックス・ユデーオールム」

という。

「ナザレのイエス、ユダヤの王」

という字です。これはラテン語とギリシア語とヘブライ語の三つで書かれてあったという。ギリシア語では

「ホ・バシレイウス・トーン・ユデーオン」

という言葉です。そういう嘲りの罪標の下でもって語られているわけです。

そういうわけで、第一言は、深い執成しの贖罪の愛の言葉がまず第一に発せられた。

●「今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし」(第二言)

順序は必ずしもはつきりしませんが、二番目に普通考えられているのはルカ伝23章43節の言葉です。右か左かわからんけれども、一方の十字架にかかっていた盗賊が言った。

「³⁹十字架に懸けられたる悪人の一人、イエスを譏りて言う『なんじはキリストならずや、己と我らとを救え』⁴⁰他の者これに答へ禁めて言う『なんじ同じく罪に定められながら、神を畏れぬか。⁴¹我らは^な為しし事の報^{むくい}を受くるなれば当然なり。然れど此の人は何の不善をも為さざりき』⁴²また言う『イエスよ、御国^{みくに}に入り給うとき、我を憶^{おぼ}えたまえ』

「憶^{おも}う」というのは「アナムネオー」という字です。プラトンの哲学に

「アナムネーシス」「憶い出し」

というのがある。天界を地界から、本当の故里を憶うという。魂の故里に帰るわけです。

⁴³イエス言い給う『われ誠に汝に告ぐ、今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし』(ルカ23・39、43)

「今日なんじは我と偕にパラダイスに在る」

と。これは、キリストの発せられた言葉のうちで私は大好きなものの一つです。

彼らは宗教的自己義認者である。またその手下ども一味の者たちに、

「みんな間違っている。為すところを知らない」

と言って、敵のために、自分を極刑に処した者たちのために赦しの祈りをされた。

今度は、自分たちが極刑に処せられているところの、そして生涯が本当にいわゆる悪いことを散々した二人の盗賊が非常に対照的です。片一方は、人生の最後の一瞬に

「悪かった。せめても憶^{おぼ}えていただきたい」

と言った。

「自分はもうしようがない」

と言って、放蕩息子と同じように、あれよりもっと深刻に。これはもう息を引き取ると



きだから、ルカ伝15章以上に深刻な場面です。そうしたらば、まっ先に、「なんじ我と共にパラダイスに、仮天国に入る」と言われた。

今、私は「仮天国」と言いました。「仮天国と仮地獄」です。新しい方もいらつしやるから、私の図表をお示しします。『無教会神学論』という本の中に書いてある。

これはこの世、悪の世です。「悪の幕屋」というのはこの世のこと。この世の君、サタンが君臨している。ここにキリストの十字架がある。けれども、その中に本当の幕屋がある。キリストに従っているところの「聖霊の幕屋」があるわけです。教会というものは本来みんなそういうものです。永遠の世界から、天地創造から神の国に向かって、神の時が流れている。

「御国を来らせたまえ」

という祈りは、時をこちらに縮めようとしている線ですから。狭き門、十字架を通して引つくり返ると、これがパラダイスの世界です。そして最後に、一番の悲願は、この世そのものが全部、天国に変わることに。この三角形は合同でなくてはいかん。けれども、現実はそのならんですよ。万人救済がキリストの悲願です。歴史がだんだん進んでいって、ある時にこれが歴史の終り、最後の審判の時がくる。そうすると、このパラダイスに入っている人たち——幾人の人か知らないけれども——それが今度はそちに入っていく。これが本当の天国だ。新天新地、神の国です。仮地獄はここに大きく開いている。ここは地獄、「ゲヘナ」です。このゲヘナは「第二の死」を通して、今度はこつちの世界に入っていく。そんなように私は考えたわけです。

●絶対無条件の救済

「天界に私と一緒に入っていく」

という。これは絶対無条件の救済です。贖罪から、本当のその次の世界に救われていく。救済ということが、この十字架の第二言でもって、第二の言葉でもって、この盗賊に向かつて言われた。

「あんな野郎は」

とみんなに思われているのが、どっこい一番先に天国に入ってしまった。だから、

「誰が天国に入るか？」

なんていうことは、人が人の品定めは絶対にできないということです。

「あの人は行くだろう」

と思っているのが、

「どっこい、待て！」

ということになったり、



「あんなやつが？」

と思っっているのが行ってみたり。それは神さまだけがなさること、これは人には分かりません。キリスト教を信じていたから入るわけでもなければ、マホメット教であるから入らないわけでもない。私はそういった宗派的な品定めは大嫌いです。神さまは人間を見るのに、そんなレッテルでなんか絶対にご覧にならない。大きな目と大きな深い判断をもって、端倪すべからざる審判をなさる。我々の側には、平伏しの碎けの態勢の他に何も無い。

そこが本当に自分の何ものかに絶する、無の世界だということです。「無教会」の無くらないものではない。私はどうしようかと思っただけで考えたけれども、やはり今度の『曠愛新書』第3号には『無教会神学論』を載せることにしました。読んでみると、やっぱり変わらない。これは本当にそこから、そこを突き抜けて、私がここに火花しているものはもつと燃えている世界だからね。どうしても仕方がない。皆さん、「神学論」なんていうと、

「神学は頭のことだ」

なんて思ったら、とんでもない間違いだ。今度出たら、じっくり読んでいただきたい。

「今日、なんじは我と共にパラダイスに在るべし」

と。こんなうれしい言葉はないじゃないですか。私の墓標にはこの言葉を記してもらおうよ。

「汝、今日われと共にパラダイスに在る」

と。今度は、「在るべし」ではなくて、「在る」ということです。私たちの信仰の現実、

「今日、なんじ我と共にパラダイスを行く」

のである。地上を歩いているのだが、そこはパラダイスである。

「私が居るところは、そこはパラダイスである」

と。これは何も最後の言葉ではない。我々の毎日毎日のキリストの恩寵の言葉です。

「でも、私はまだこうですから」

なんてことは言わせないんです、キリストは。無条件です。十字架上の盗賊がそのようにして入ったではないですか。

「大事なのは唯だ一つだ。碎けの心だ」

と。自分を本当に無としている。何ものでもない。無者としている。

「無者こそありがたい。賜りたる無者であるぞ」

と言っ、本当の無者、震いをもつて進んで行かなくては。

そうでしょ。この集会の方々が、今くすぶったような顔してないだろうな。くすぶっていたらダメですよ。うれしいんだか、悲しいんだか、何だかわからないような、皆さんはそういうことではないと私は思っていますかね。もつともつと、

「何とまあ、生命に、喜びに満ちているか」

ということではなくては。ある人が私の手を見て、あなたはもの凄い生命力を持っていると言った。手相でも何でもないけれども。生命力が与えられているわけです。



今日はここに花があるが、本当に生き生きと青々としている。また、今日は桜が満開で、桜のような日曜日です。福音を受けとっている人が、

「今の自分の身边にどういふ問題があるうが、自分がどんなに今行き詰まりでいろいろなことであろうが、何だ」

と。だから、私は「中央突破」と言う。そんなことで挫けるようなことだったら、

「もう、信仰はやめた方がいい」

と申し上げているとおりなんです。本当ですよ。

イエス・キリストというひとをこの福音書で見てごらん下さい。また、書簡でパウロというひとを見てごらん下さい。まあ何と、何よりも彼らは本当に生命にあふれて、喜びにあふれているではないか。神さまが本当に彼らを貫いているではないか。あなた方は一騎当千です。東京中どこを捜してもいないようなクリスチャンでいてください。

「そうです、あなたと一緒に私は今日、パラダイスを歩いているようなものです」

と。これは本当に突き抜けた魂になれば、はつきり言えるんです。宗派根性で何のかのとやっているうちはダメです。何でもみんな包摂してしまう。「幕屋」なんていっても、この幕屋には垣根なんかないんだ。誰だつて入ってきている。誰が入ってきて、どんな道場破りをしようとしたつて、これは破れません。それはもう始めから破れているんだから始めから

「破れ幕屋」

と称うんだ。どうも不思議なことになってしまった、こんなやつが。その私の気合をとりそこなつて、若い青年が、やれ

「先生はこうだあだ」

と言って、いい加減なところで幕屋を去っていく。私は気の毒でしようがない。何を見ているのか。何を聞いているのかと思ってしまう。どうか、皆さんは、私を貫いている一番大事なものをグツと、

「そうだ！」

と共感して進んでいただきたい。

●「なんじの子なり。なんじの母なり」(第二言)

それから今度は、ヨハネ伝19章26節のところで、

「²⁵さてイエスの十字架の傍らには、その母と母の姉妹と、クロパの妻マリヤとマグダラのマリヤと立てり。²⁶イエスその母とその愛する弟子との近く立てるを見て、母に言い給う『おんなよ、視よ、なんじの子なり』²⁷また弟子に言いたもう『視よ、なんじの母なり』この時より、その弟子かれを己が家に接けたり。」(ヨハネ19・25～27)



マリヤに、

「おんなよ、視よ、なんじの子なり」

と、弟子ヨハネを指してこう言われた。また、ヨハネに、

「視よ、なんじの母なり」

と言われた。人間イエスの本当に美わしい心が表れた。

「お母さん、我なんじと何の関わりあらん」

なんて、カナの婚宴では言い放ったようなキリストが、

「これはお前の子だよ。これはお前の母だよ。親しく暮らしていつてくれよ」

と。本当に神族関係をそこに展開した。皆さんも、これは兄弟姉妹であり、またお母さんと娘であり、また霊の父、また子というような、そういう親しい関係が我々の間には、天国的な関係というものが地上の関係の他にあるわけです。それが

「エクレシア」

という、

「呼ばれたる者たち、召されたる者の群」

という——「召団」と藤井先生が言ったが——

「召されたる団体」

という、聖書的な言葉で私が「幕屋」と言いだしたのはそういうわけです。本当にそういった親しさですよ。この世の秩序は秩序。また天的な交わりの世界は交わりの世界。そこがゴタゴタにならないでちゃんといけるんです。

そういう真のエクレシアの内実を、神の民の神族の、神の家族の事態をキリストはここで言われた。洗礼のヨハネは、あれは血筋の上からいっても親戚関係になるんでしょけれども、このヨハネはそうではない。これが第三番目の言葉で、即ち、エクレシア的な本当に親しい交わりの世界。また、本当のざつくばらんな会話の世界ということなんです。

●「なんぞ我を棄て給いし」（第四言）

四番目が、有名な先程の詩篇22篇の、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

という言葉です。これはマタイ伝とマルコ伝に書いてあって、ルカ伝にはない。マタイ伝27章46節、マルコ伝15章34節です。

「46三時ごろイエス大声に叫びて『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』と言い給う。

わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いしとの意なり」（マタイ27・46）
（マタイ27・46）

「34三時にイエス大声に『エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ』と呼り給う。
（マタイ27・46）

之を釈とげば、わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし、との意なり」（マルコ15・34）



「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」（マタイ）

「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」（マルコ）

という。「エロイ」というのはアラミ語的な言い方です。マルコ伝は即ち、一番アラミ語的なキリストの言葉をそのままもってきた。ヘブライ語では「エリ」です。「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」という。

「わが神、わが神（エリ、エリ）、なんぞ（ランマ）、我を（ニ）棄てたまひし」

という。

「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給ひし」

と。これは一体、何をキリストは叫ばれたか。それは神の義です。

あるべからざることが起きた。キリストを十字架に架けるなんていうことは、そもそもあるべからざることです。世の中で一番あるべからざることとはキリストの十字架である。であるから、キリストは神の聖なる憤りと同じものをここに発せられた。人間の罪は罰せられて、地獄行きであり、第二の死、滅亡で――

「罪の価は死なり」

という。黙示録の終りの方に

「第二の死」

という言葉がありますが――それでもうお終いになってしまふ。ダンテの『地獄篇』の地獄は仮地獄です。最後の地獄は何だか分からない。

神の義が通らない。神の秩序が破られた。この罪の世には別な法則が働かなければ、罪の世は滅びてしまふ。その別な法則が即ち贖いの法則である。贖罪の法則が働いて担われているわけです。神の法則が直ちに直線的に進んでいけば、それは審判で滅びである。預言者アモスが、

「どんなところに逃げたつて、神さまは追求して滅ぼしてしまふぞ」

と、烈しい言葉をもって神の義を宣言しました。

「けれども、神にお前たちが今のうちに立ち返るならば、救われる」

とは、もちろんアモスも言ってますけれども。

「立ち返らざるかぎり、神の義は徹底的に滅亡をもたらずぞ」

と言う。徹底的な愛と徹底的な義です。この義の面が仏教にないとは言いませんけれども――何と言いますかね、その働きと言いますか、役割と言いますか――それがあるところで、大慈大悲に変わってしまうんです。けれども、福音の世界では、義は貫いている。この義と愛の間に十字架が立っているわけです。

この愛も直線的な愛ではない。義があるところの愛である。この十字架があるから、

「神の義は福音のうちに現れた」

とパウロが言ったのはそのことです。「神の義は福音のうちに現れた」というのは、この義



は審判の義であると同時に、恩寵の義に変わる。与える義と変わるわけです。このことに気がついたのが、ルターの宗教改革の、ルターの胸の中です。

「自分は責められて、キリストの前にどうにもならん。もうこれ以上、自分は修道僧としての生活をして、本当の平安も喜びも生命もない。どうしたらいいか。キリストの義が恐ろしい。ところが、キリストの義は与える義であつた」

ということに彼は気がついて、そこに宗教改革が起きた。

「義人は信仰によつて生きる。信仰によつて義とされる。義を与えられる」というパウロの言葉が初めてルターに響いてきた。

「私の義ではない。イエス・キリストの義でなければ、どうにもなりません」

というわけです。この義は天地を貫いているところの脊椎骨です。その神の意志の貫くところに自分を完全に置いて、

「汝の御意を、汝の義を、汝の愛を成らしめたまえ」

と祈る。直線的に私たちを神さまは愛してくださっているんだけど、それではどうにもならない。義というものをそこに含んでいる愛でなければ。

北森さんが「神の痛みの神学」なんてことを言いだしたのはそのところの消息を言っている。しかし、痛みだけではないかん。キリストを中心にして、我々の救いがキリストであるならば、キリストは痛みのひとではない。

彼は砕けの人である。キリストは十字架の砕けにおいて初めて私たちに本当の愛と本当の義を与えとなさつた。その実質は何かというと、今度は、聖霊の問題になってくるわけです。

●絶対矛盾の叫び

「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし」

というイエスの言葉は神の義を主張するところの訴えです。神の義を完全に行じ、御意を完全にしとげたキリストである。

「なぜ、この義が立たないんですか」

という、絶対矛盾の叫びです。

「赦せ」

という言葉と、この

「なんぞ棄てたまひし」

というのは絶対矛盾の中にある。それは十字架においてだけ語られるところの、十字架においてだけ叫ばれるところの絶対矛盾である。この絶対矛盾を十字架が一つにしてしまつた。それでなくては、この叫びは空しくなつて、単なる人の恨みの叫びになってしまう。そうではない。

それはパウロがロマ書3章で言っている有名な言葉が表しているとおりです。ロマ書3章25、26節のところはパウロ神学を中心です。21節から、

「²¹然るに今や律法の外に^{ほか}神の義は顕れたり、律法の義ではない。神の義が顕れた。

これ律法と預言者とに由りて証^{あかし}せられ、²²イエス・キリストを信ずるに由りて

受けとることによって、

凡^{すべ}て信ずる者に与えたもう神の義なり。

この「神の義」を私たちに、神の前に本当に平伏すときに、無条件に与えてくださる。己の義ではない。だから、自己義認のパリサイ根性から完全にぬけてしまう。我は何ものにもあらずと。神の義を私するのではない。神の義は恩寵です。

「我は何ものにもあらず」

ということです。だから、人を審くことがなくなってしまうわけです。審くのではなく、今度は大きく人を容^いれてしまう。

決定的勝利ということは実は、一切包^い摂のことなんです。一切を包摂することが決定的勝利です。私はむしろ「一切包摂」と書かなかった。戦闘的な言葉で書いておいた。

「キリストの中に入ると、一切を包摂する」

という、何とも言えないことになってしまうから。人にどう言われても何ともない。

「どうもお気の毒ですな」

と。本当ですよ、私は力んで言っているのでも何でもない。

之には何等の差別あることなし。²³凡ての人、罪を犯したれば神の栄光を受くるに足らず、²⁴功^{いさお}なくして神の恩恵^{めぐみ}により、キリスト・イエスにある贖罪^{あがない}によりて義とせられるなり。

ここには「信仰によりて」とは書いてない。

「キリストの贖罪によって義とされる」

と。「それを受けとることによって」ということであって、「信仰によりて」ということを無教会が——無教会に限らない——プロテスタントが

「信仰によって義とされる」

ということをあまり前面に出しすぎてしまつて困る。実は、

「キリストの贖罪によって義とされる。贖いによって義とされる」

ということですよ。

²⁵即ち神は忍耐をもて過^{すぎ}来しかたの罪を見^み通し給^{たま}いしが、己の義を顕さんとて、キリストを立て、その血によりて信仰によれる宥^{なだめ}の供物^{そなえもの}となし給えり。
²⁶これ今おのれの義を顕して、自ら義たらん為、またイエスを信ずる者を義



とし給わん為なり。

●絶対無条件降伏

神さま自身が義たらんためです。それは十字架において、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

というところに、神自らの義が顕れている。しかもその義は審きつつ救ってしまう。十字架を通して審きつつ救ってしまう。

だから、神の審きは恐ろしくくないですよ。神の審判は、審判のための審判ではない。神さまの前に

「無条件に参った！」

と言うときに、初めて本当の救いがそこに来るんです。

²⁷然らば誇るところ何処にあるか、既に除かれたり、何の律法に由りてか、行為の律法か、然らず、信仰の律法に由りてなり。

信仰という新しい法則によってだぞと。

²⁸我らは思う、人の義とせらるるは、律法の行為によらず、信仰に由るなり。「信仰にのみ因る」と、ルターは「のみ」を付けたわけです。

²⁹神はただユダヤ人のみの神なるか、また異邦人の神ならずや、

差別はない。絶対無差別だと。

然り、また異邦人の神なり。³⁰神は唯一にして割礼ある者を信仰によりて義とし、割礼なき者をも信仰によりて義とし給えばなり。」（ロマ3・21～30）

教会に属するも属さないも、カトリックであろうとプロテスタントであろうと、何であろうと、そんな人間の側の相対的な差別は一切ないとパウロはちゃんと言っているんだ。はつきりしている。パウロの中には深い深い、おのずから深い神学が——神学という言葉がおかしいけれども——神学的法則が、神の法則がちゃんと自ずから言われている。天衣無縫的な言葉です。

これが即ち、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

と言って、神の義が貫かれて、その義が与えられるという、キリストのこの叫びの中に、私たちはこの叫びの下にもう絶対無条件降伏です。聖書が分かるの分からないのではない。そんなことを言っているときではない。

●「われ渴く」（第五言）

五番目の言葉とされているのは——何も順序はどうでもいいですよ——ヨハネ伝19章の、「われ渴く」



という言葉です。キリストは血を流して——血を流すと渴く。手術をなさった方は分かるでしょ、あとで非常に喉が渴く。盲腸の手術でもそうでしょ、私は盲腸の手術をしたことはないけれども——血を流しておられるから、非常に渴いておられる。「われ渴く」と言う。私たちはこの渴きにおいて、

「義に飢え渴く者は幸いなり。その人は飽くことを得ん」

という言葉を思う。キリストは血を流して、血に渴いている。

「血は即ち生命のあるところ」

と、創世記9章に書いてある。だから、

「この血を飲め、この肉を食らえ」

と言われたのはそのわけです。私たちに与える生命です。

「これは私が流す血だ。これは私が裂かれるところの肉だぞ」

と、最後の晩餐がそれです。イエスは十字架上で肉を槍で裂かれたり、血を流したりする。それを晩餐のところで先ず予表的に仰ったわけです。

「それを靈的に受けよ。私は徒^{いたずら}に犬死するのではないぞ。私の中にあるこの

靈的な血と靈的な肉を食らい、私自身を『わが血の血、わが肉の肉』とせよ」

ということです。それで私たちがそれを靈的に受けとるならば、その生命力は本当にどんなことがあっても、その内側から出てくる。

「神癒」

とか何とか言ってるが、何も神癒なんてことを言う必要はない。あなた方自身の中に既に神癒的な働きがこの信の世界では来ている。どうぞ、本当の生命力は肉体的現象の奥にいつも無条件に受けとられるということを喜んで受けて進んでいただきたい。

●「わがこと終りぬ」(第18言)

第六番目に、

「わがこと終りぬ」

と言われた。

「これで私の仕事は終わった。贖罪は完了した」

と。終わって、そして今度は、本当にまた始まるわけです。

「事の終りは始めなり」

という言葉があるけれども、キリストの終りは今度はまた本当の始まりが——終りのあとで静かな暫くの時があった——それからイエス・キリストは復活しました。

復活は、息が吹き返したということではない。キリストに宿っていたところの神の靈的生命が、今まで肉のキリストに宿っていた以上の輝かしきをもって、光体をもって、光の身体をもって、変貌のキリスト以上であるわけです。



ところが、マタイ27章50節、マルコ伝15章37節、ルカ伝23章46節に、

「⁵⁰イエス再び大声に呼わりて息絶えたもう」（マタイ27・50）

「³⁷イエス大声を出して息絶え給う」（マルコ15・37）

「⁴⁶イエス大声に呼わりて言いたもう『父よ、わが霊を御手にゆだね』」（ルカ23・46）

とある。大声に呼ばれる。マタイ伝とマルコ伝は内容が書いてない。ルカ伝の言葉は、

「大声に呼わりて言いたもう」

という言い方は、呼ばわったことがそういう言葉であるか、呼ばわったあとでかく言い給うたか、どうもそのあとの方の気持であつたのではないかと思います。この場合の事実としては、

「大声に呼んだ」

ということと、あとで

「父よ、わが霊を御手にゆだね」

と言つたのとあるが、これを特別に大声で呼ぶというのはちよつとおかしい。むしろこれは親しくキリストは神さまに言われたと私はとりたいたい。大声に呼ばわったのは何だかわからない。もはや絶言の言葉です。絶言の言という。即ち絶叫です。霊言的なものです。異言霊言的なものがこの「大声で呼ばれる」ということ。そうしたら、何が起きたかというところ、

「³⁸聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなりたり」（マルコ15・38）

という。聖所と至聖所との間の幕屋の幕が二つに切れてしまった。これはもはや旧約宗教は要らんということです。旧約宗教はアウフヘーベンした。旧約の宗教はこの私の贖罪の死をもつて、大祭司が羔羊を屠ることは要らんと。イエス・キリストは自らが祭司であり、自らが羔羊こひつじですから。旧約宗教のそんな儀式的なことは全部、本当の実質をもつて成したから、いわゆる旧約的な幕屋はお終いだということです。今度は、本当にキリストの新しい幕屋、聖霊の幕屋であるということになるわけです。これが二つに裂けたというのは、正に私はそうであつたと端的に信じます。

●「わが霊を御手にゆだね」（第七言）

むしろ、十字架の七言の、その意味のある言葉は、「父よ、わが霊を御手にゆだね」という、この言葉が第七番目でしょう。これは詩篇31篇5節に、

「⁵われ霊魂たましひをなんじの手みてにゆだね。エホバまことの神よ、なんじはわれを贖いたまへり」

という素晴らしい祈りの文句がある。

「あなたは私を贖ってくださったから、もう私は一切あなたにお任せです」

と。それは、任せて傍観しているのではない。



「あなたにお任せして、ただあなたの力と生命と御言で行きます」

と、これが「委ねる」ということです。委ねるということは、ただこっちはのほほんというわけではない。「信頼」という言葉が、ヘタすると、ちよつとそんなような具合に響いたりするといかん。委ねる世界は、祈りの世界ですから。祈りを通さないで、「委ねる」なんて言ってみたって、それは始まらない。それ自身がもう既に祈りなんですから。そして、神の示しに従って、自由自在に動く。

これは最後の言葉であると同時に、委ねてキリストは本当の信頼と同時に、今度は本当の希望がそこに生ずるわけです。信頼と希望です。

「さあ、これから私の霊は天界へ行つて、それからあなたと一緒に今までよりも、もっと凄い展開をいたしましょう。ペンテコステを通してから、地の涯までも世の末までもあなたと一緒に働きましょう」

というのがこの「委ねます」という言葉の信頼にして希望である。

十字架の言葉の中には愛と義と信と望とがある。信・望・愛・義を、それから先程の民族的なエクレシヤ的なものを、何と不思議なものをおのずから含んでいはいないかと思う。そして、わけの分からないあの

「大声」

というのが、もう説明ができない——この七つの言葉をひつくるめてしまえば——一つの大声である。一つの霊言であつて、これは分からない。私はそう思います。

そのような具合にして、イエスは十字架において、今までの実存の最後のもの凄い総くりをおのずから為し給うた。実存の裏付けをもって、最後の十字架を——私たちが

「十字架の七言」

と言うならば、それだけのまたそれ以上の角度をもって質をもって——これを捕まえて、そして復活のキリストにでつくわさなくてはいいかん。それはもう、それだけつかめば、復活のキリストにでつくわさざるを得なくなってきました。終わります。

